（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　金京南（キムキョンナム）

インド初期大乗経典の一つに『十地経』がある。菩薩に期待された修行実践上の十の階梯と、それぞれの階梯において学ぶべき教理を詳細に示す経典として知られ、後に『華厳経』を構成する主要な一章（十地品）として編入されることにもなる。ヴァスバンドゥ（世親 400-480 頃）作の『十地経論』は、この『十地経』に対する重要な注釈で、中国では同論を所依として地論学派が成立し、さらに華厳教学の展開に大きな影響を与えた。とくに教理的な影響度の点で際立つのが「六相」と「唯心」の両説である。本研究は、これら両説を中心として『十地経論』の文脈を精査するとともに、依拠する『十地経』そのものに遡って考察を加え、従来の研究とは異なる複数の視点に立ってヴァスバンドゥ自身の解釈上の特色を浮き彫りにする。

サンスクリット本、チベット語訳および 5 種類の漢訳によって伝承される『十地経』に対して、『十地経論』にはチベット語訳と漢訳それぞれ１本が現存する。本研究は、『十地経論』についてはチベット語訳を、また同論が依拠する『十地経』に関してはサンスクリット本とチベット語訳を中心とし、漢訳との比較考察を交えながら研究を進める。

（１）の序論において論文の目的と方法を論じ、先行研究への批判的な総括を行ったのち、『十地経』および『十地経論』のシノプシスを提示したうえで、両文献における「六相」と「唯心」の位置づけを明らかにする。六相を考察する（２）章では、総・別、同・異、成・壊（菩提流支訳）の６つの特徴の意味を両文献それぞれの文脈の中で検証する。『十地経』においては、『十地経論』の著者としてのヴァスバンドゥや従来の解釈に見るような教説の特徴をさすのでなく、菩薩行の内実にあたる階梯（地）相互の関係を３つの視点から対比的に特徴づけるものであると結論づける。そのうえで、ヴァスバンドゥによる経文解釈法としての「六相」解釈が、いかなるテキスト理解と独自の文脈設定において成立したものかを明快に論じる。唯心を論じる（３）章においても、著者は同様の方法を適用し、『十地経』の文脈を押さえたうえで、ヴァスバンドゥによる解釈の特色とともに、唯識・中観両学派による解釈論争とその背景をも明らかにしている。附論の「菩提流支の訳語について」、ならびに当該箇所の校訂テキストと訳注もまた貴重な貢献である。

以上のように、本研究は「六相」と「唯心」の両説を題材として、経典の思想内容に関する後代の発展的な解釈を、経典そのものの文脈に遡って検証し、そのうえで解釈上の変容と発展の経緯を明らかにするという方法の有効性を実証している。今後の『十地経』および『十地経論』研究に新たな視点と方法を提示し論証したという点で、本論文はきわめて意義のある業績として評価することができる。一部にやや明快さを欠く論述は見られるが、本研究の画期的な意義を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値する業績であると判断する。